



目次

巻頭コラム「宮沢賢治と森鷗外～宮沢賢治記念館の現在～」宮澤明裕(宮沢賢治記念館学芸員)／展示報告／地域情報／展示のお知らせ
 コレクション展「少しも退屈と云ことを知らず 鷗外、小倉に暮らす」／展示会場から／ショップ便り／カフェ便り／論考「石田少佐の微笑み―『鷗』を読む人のために―」田中 実(都留文科大学名誉教授)／活動報告／これからの催しもの／編集後記



宮沢賢治と森鷗外

宮澤明裕 (宮沢賢治記念館学芸員)

鷗外と賢治、二人の生涯には若干だが重複の期間がある。しかし残念なことに、実際に面会したという記録や、お互いの作品について言及をしているという事実はない。また賢治の作品が世の中に出はじめたのは鷗外の晩年であり、賢治が創作した詩や童話を鷗外が読んでいた可能性は極めて少ない。だが逆はどうだろうか。……というより賢治は絶対に鷗外を知っていたはずである。

森鷗外は、誰もが認める超万能型の有名作家である。さらには陸軍の軍医でもあり、多言語で書かれた書物の翻訳、文芸批評など、あらゆる分野において「一流」といえる。当時そんな著名人を賢治が知らないはずはない。そして鷗外は、文芸雑誌『スバル』(1909-1913)の同人として「雁」や「青年」などを掲載しているが、この雑誌の創刊号発行人は、賢治が学んだ盛岡中学の10年先輩にあたる石川啄木である。賢治が盛岡中学に在籍していた頃、啄木は既に文芸界における有名で賢治にとって憧れの存在であった。そんな啄木にゆかりのある文芸誌の同人を、賢治が好み読んでいた可能性は十分にある。

なお、賢治が鷗外の影響を受けたといわれるものに「農民芸術概論綱要」があるということは、既に過去の賢治研究で明らかにされている。鷗外はエドワード・フォン・ハルトマン「美の哲学」を翻訳しており(『審美綱領』)、そこには次のようにある。

一方、賢治の「農民芸術概論綱要」には次のような文がある。

準志は多く香味と触を伴へり
声語準志に基けば 演説 論文 教説をなす
光象生活準志によりて 建築及衣服をなす
光象各異の準志によりて 諸多の工芸美術をつくる
光象生産準志に合し 園芸營林土地設計を産む
香味光触生活準志に表現あれば 料理と生産とを生ず
行動準志と結合すれば 労働競技体操となる

どちらにも「準志」ということが使用されているが、「準志」とは鷗外による造語である。その意味は「目的」や「用」が定義とされ、この造語を賢治は「農民芸術概論綱要」の中で数多く使用していることがわかる。

昭和初期、賢治はそれまで勤めていた農学校の教師を辞め、羅須地人協会を設立し農業の実践を始めた。そこでは農村の中堅となる後継者の育成も視野に入れながら精神的に活動を行い、農村の発展に尽くそうとしたのである。その理論として作成したのが三つの文章から成る「農民芸術」論で、その一つが「農民芸術概論綱要」であった。もともと賢治の「農民芸術」論は、ウィリアム・モリスやトルストイといった複数の作家の思想の断片が垣間見られることでも知られているが、鷗外による造語が、賢治の後半生の活動を支えるものの一つとして存在したことは非常に興味深い。

作家としての賢治は鷗外と違い、生前は一部の読者や評論家のみにしか知られることはなかった。しかし没後は、創作された「銀河鉄道之夜」や「セロ弾きのゴーシュ」、「風の又三郎」などの未発表であった童話が、書物だけではなく映像や演劇といった様々な形態にもなり、多くの人に愛される作家となる。そして現在、当館には賢治とはどのような人物なのかを知るために、全国から多くの人が来館する。さらには科学や芸術、天文、宗教、農業といった多彩さから、今もなお、あらゆる研究分野からのアプローチも多い。



宮沢賢治記念館
花巻市矢沢第1地割1番地36 TEL:0198-31-2319
開館時間 ● 8:30~17:00
休館日 ● 12月28日から1月1日まで
入館料 ● 小・中学生150円、高校生・学生250円
一般350円

そんな宮沢賢治記念館の現状について、ここで少しだけ紹介をさせていただきたいと思う。
当館では、賢治の創作の原点といえる約3400枚の作品草稿をはじめとする資料を所蔵している。草稿の殆どは大正期から昭和初期にかけて執筆されたもので、紙の質は和半紙や西洋紙のものもあれば、薄半紙といったものにまで及ぶ。さらに筆記具に関しても多種のインクや鉛筆、墨等が使用され、草稿一つ一つの状況が異なる。中には劣化が進行し形状を保つことができないものもあり、今後、何も処置をしなければ朽ちるであろうというものもあった。
このような状況を防ぐために、当館では平成27年度から、それら資料の修復に取り掛かり、そして修復を終えたものに関しては、特別展での公開ができるようになった。ただし、これを行っていくためには慎重な作業を伴うとともに、かなりの費用を要する。そのため、全ての資料に対して一度に処置を施すことは難しく、長期的な作業となる。地道な取り組みではあるが、当館にとって直筆をはじめとする関連資料を大切にみてもらうことが、賢治を知りたいと訪ねてくる人の期待に添えることだと考える。これは当館に限ったことではなく、多くの作家の資料を持つ顕彰施設に関しても同じことがいえるだろう。
資料を後世に繋いでいくことの重要性をもとに、修復と保存、そして公開についての方法を模索しながら館としての役割を果たしていきたい。

展示報告

特別展

「鷗外の『うた日記』」

「詩歌にうたった日々を編む」

会期：2018年10月6日(土)～
2019年1月14日(月・祝)



展示室1

展示室2

『うた日記』は、日露戦争中に鷗外が戦地で創作した詩歌を、戦後自ら編集し刊行した詩歌集です。収録作品数は、短歌や俳句、詩など570以上もあります。この大著をどのように展覧できるのか、残された資料を探る旅から始まりました。

館蔵資料の中で鷗外が戦地から書き送った書簡が70通以上、そのうち40通以上に詩歌をみることができました。これらは、鷗外が戦地でうたった詩歌です。『うた日記』を活字ではなく、鷗外の自筆で紹介することにしました。

第一章は「うた日記の世界」とし、『うた日記』掲載順に詩歌を並べました。前半部は、本展の詩歌監修・岡井隆氏のご著書『森鷗外の『うた日記』』や、先行研究の解説とともに掲示しました。『うた日記』の表記法を崩さないよう心がけ、句ごとの一字空け、分かち書き、改行など、鷗外が示したかたちを再現しました。後半部は、鷗外の長男・於菟・妹・喜美子、末弟・潤三郎、妻・志げら家族の他、知友に宛てた書簡の中から、詩歌が書かれたものを展覧しました。詩歌以外の書き込みがあるもの、絵葉書の絵や写真と調和をとるよう文字を書きこんでいるものなど、『うた日記』でも『鷗外全集』でも見ることのできない、生原稿の趣を味わうことができました。

第二章「詩歌にうたった日々」では、鷗外が所属していた第二軍の進軍を俯瞰し、戦地での出会いや日本の家族との通信の様子を紹介しました。戦地での鷗外の足跡を追い、地図に落とし込むことで、『うた日記』の背景を確認することができました。また、館蔵資料調査から、鷗外の新橋出発日について新事実の発見もありました*1。
第三章「うた日記を編む」では『うた日記』編集過程と、鷗外の詩人・歌人との交流や

地域情報

小石川後楽園 「梅香る庭園へ」

2019年2月9日(土)～
3月3日(日)

小石川後楽園は、国指定特別史跡および特別名勝に指定される、水戸徳川家の江戸上屋敷内の庭園です。鷗外も小石川後楽園を訪れていたことが『鷗外日記』から分かります。
寛永6(1629)年、初代藩主・頼房が庭の造営に着手し、「水戸黄門」で知られる二代藩主・光圀の代に完成しました。明の儒学者・朱舜水の意見に従い、中国趣味を取り入れた回遊式築山泉水庭園となっており、「後楽園」という名称も「天下の憂いに先だつて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ」という中国の教えを元にしています。
園内では、2月9日から3月3日まで約1ヶ月間、梅を楽しむイベント「梅香る庭園へ」が開催されます。会期中には、特別ガイドツアーや琴の演奏会などさまざまな催しが行われる予定です。鷗外も見た風景をお楽しみください。

展示のお知らせ

コレクション展

「少しも退屈と云ことを知らず 鷗外、小倉に暮らす」

会期 ● 2019年 1月19日(土) - 3月31日(日)
 (会期中の休館日) 2月25日(月)・26日(火)、3月26日(火)
 会場 ● 文京区立森鷗外記念館 展示室2
 開館時間 ● 10時~18時(最終入館は17時30分)
 観覧料 ● 一般300円(20名以上の団体:240円)
 ※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料
 ※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット(押印入)、友の会会員証
 (ご提示での割引)
 ※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

関連事業のお知らせ

展示会期間中に関連イベントを予定しております。申込方法は8頁をご覧ください。

講演会「清張の描いた鷗外」

講師 山田有策氏(東京学芸大学名誉教授)
 日時 2019年2月23日(土) 14時~15時30分
 会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室
 定員 50名(事前申込制)
 料金 無料(要本展観覧券(半券可))
 申込締切 2月8日(金) 必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。
 1月30日、2月13日、27日
 いずれも水曜日14時~(30分程度)
 申込不要(展示観覧券が必要)

学生ボランティアによるギャラリートーク

展示室にて文京区内大学の有志が解説を行います。
 2019年3月中開催予定
 申込不要(展示観覧券が必要です)
 詳細は当館HPをご覧ください。

同時開催

「明治20年代の鷗外の人物交流」

文の京ゆかりの文化人顕彰事業
 2018年に生誕150年を迎えた作家・山田美妙、内田魯庵を中心に、明治20年代の鷗外と文学者との交流を紹介します。
 ※コレクション展開催中のコーナー展示です(会場・展示室)。通常展観覧券でコレクション展とともにご覧いただけます。

鷗外誕生日記念行事

鷗外157回目の誕生日を記念して、2019年1月19日(土)は、無料で展示会をご覧ください。



- 新刊 『日本からの手紙 文京区立森鷗外記念館所蔵 滞独時代森鷗外宛 1884-1886』
 編集・発行: 文京区立森鷗外記念館
 調査・執筆: 森鷗外記念会
 340頁/書簡151通収録/定価: 12,000円(税込)
- 既刊 『日本からの手紙 日本近代文学館所蔵 滞独時代森鷗外宛 1886-1888』
 編集・発行: 文京区立森鷗外記念館
 270頁/書簡121通収録/定価: 10,584円(税込)
- 全揃記念2冊セット
 2冊揃いのカバー装に仕立て直した限定150セット。
 定価: 20,000円(税込)
 ※いずれも送料別(着払い)

展示会場から

森篤次郎筆鷗外宛書簡
 明治18年9月15日付(部分) [402084]

鷗外の弟、篤次郎がドイツ留学中の鷗外に宛てた明治十八年九月十五日付の書簡の中で「坪井士ノ編セル書生氣質、小説神髓」が「発行ハル」と記しています。「小説神髓」は同年の四月に、『当世書生氣質』は六月に発表されたばかりでした。この記事の前に、篤次郎は、「詩文ノ雑誌」は発行されなくなり、漢詩文が流行しなくなったという消息を伝え、この記事の最後を「何ンデモカンデモ新キ物ノ已用ラル、様ナリ」と締め括っています。篤次郎が何を予見していたのかはわかりませんが、ドイツにいる鷗外にわざわざこうしたことを伝えているのは興味深いことです。我が国において、『近代文学』の名に値する文学作品が書かれるようになるのはこの二つの書物の出現を契機とするとはよく言われることですが、明治二十年代は、一方では明治以前の伝統を受け継いだ尾崎紅葉、幸田露伴、泉鏡花らの「硯友社」の文学があり、一方では二葉亭四迷や山田美妙が『浮雲』、『武蔵野』といった言文一致体の小説を発表します。ドイツから帰って来た鷗外が『舞姫』を発表したのは明治二十三年。北村透谷、樋口一葉、といった若い文学者たちの創作活動が続きます。そして明治二十年代の末には正岡子規が和歌の革新を進めて行きます。このように概観してみると明治二十年代は、我が国における近代文学の幕開けの時期であったということがわかります。

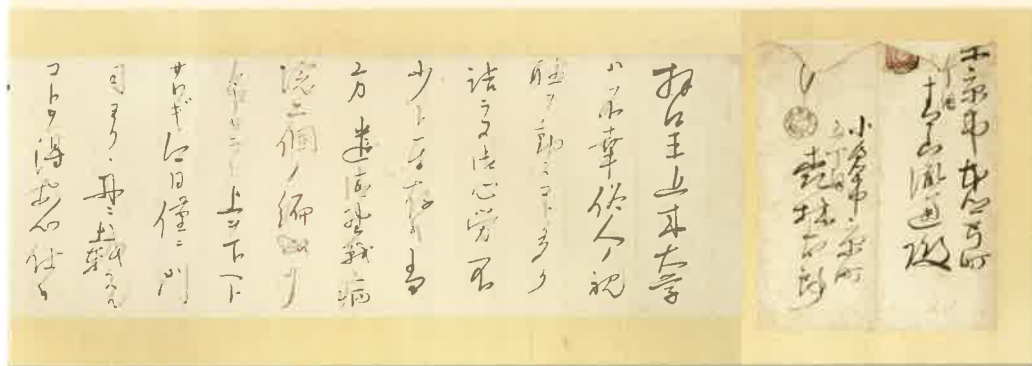
倉本幸弘(森鷗外記念会常任理事)

右: 小倉赴任前日(明治32年6月) 観潮樓の茶室前にて。大橋乙羽撮影。
 左: 小倉市鍛冶町旧居(復元) 小倉で鷗外が最初に住んだ家。



東京で近衛師団軍医部長を務めていた森鷗外は、明治32(1899)年6月、小倉(現・福岡県北九州市)の第十二師団軍医部長として赴任を命ぜられます。
 東京での鷗外は家族とともに暮らし、職務や文業に専念してきましたが、小倉では自ら家政をとる新たな生活が始まります。東京を離れて小倉にあることによって、軍医部長等の動静や文学界を、距離を置いて眺めます。そのことが、自分と他者との関係を考える機会となりました。

一方、鷗外は土地の人々と交流し、勉強会を行い、外国語の学習をはじめ、史跡を巡るなど、新たな学びの機会を得ました。明治33(1900)年12月、親友・賀古鶴所に宛てた手紙には「公私種々ノ事業ノ為メニ(中略)少しモ退屈ト云コトヲ知ラズ」と記されており、小倉での充実した日々がうかがえます。鷗外は、明治35(1902)年3月までの2年10ヶ月を小倉に暮らしました。本展では、鷗外の小倉での生活、職務、関心事を日記『小倉日記』『小倉日記附録』、友人や家族へ宛てた手紙などの資料から紹介します。また、作家・松本清張が鷗外の『小倉日記』から着想を得た小説『或る』小倉日記伝などを併せて展覧します。



鷗外筆青山嵐通宛書簡 明治34年6月28日付 第十二師団で編制した野戦病院を中国に送り出すことを知らせている。

ショップ便り

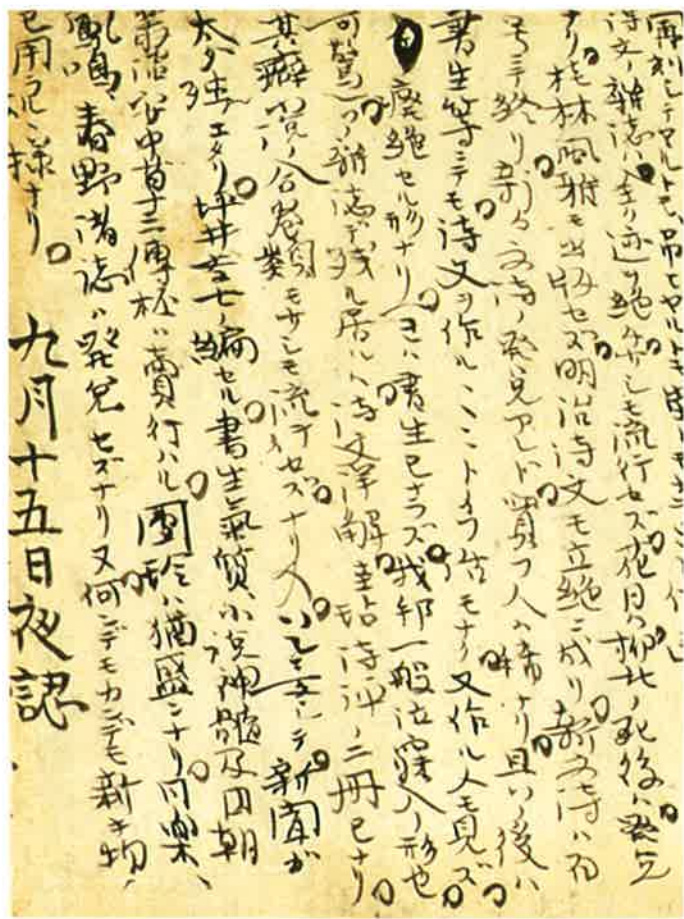
鷗外は明治17年8月から同21年4月まで、軍陣衛生を学ぶためドイツに留学していました。家族や友人たちは、留学先の鷗外にたくさんの手紙を書き送り、鷗外は帰国時にこれら大切に持ち帰りました。当館ではその内、明治17年~19年に送られた151通を所蔵しています。この度、森鷗外記念会調査・執筆の元、151通の翻刻を掲載した『日本からの手紙 文京区立森鷗外記念館所蔵滞独時代森鷗外宛 1884-1886』を発行しました。昭和58年に発行された『日本からの手紙 日本近代文学館所蔵滞独時代森鷗外宛 1886-1888』と併せて読むことで、留学中の鷗外宛書簡の全貌が明らかになります。これを機に2冊セット販売も行います。本書は当館ショップの他、ミュージアムグッズオンラインショップ「Muolle(ミュコレ)」や、通信販売でお買い求めいただけます。詳細は当館までお問い合わせください。

カフェ便り



フルーツティー 600円(税込) モリキネサンド 400円(税込)

モリキネカフェでは10月より新たに軽食メニューが加わりました。モリキネプレートに続くモリキネシリーズ、モリキネサンドです。プレートで使用しているブレッドとトッピングパンの店タンネより、けしの実付きヴァイツェンというパンにコンソウカハムのセミドライソーセージ、そして自家製のザワークラウトを挟みました。サクサクとしたパン皮の食感と、ソーセージとザワークラウトの間に添えたクリームチーズと粒入りマスタードがアクセントになっています。小腹のすく午後にはぴったりのサンドイッチです。
 また、冬季限定のドリンクメニューも始まりました。10月はホットアップルサイダー、11月にはモリキネカフェの紅茶をベースにしたチャイとフルーツティーが登場しました。フルーツティーは見た目も美しく、もちろん中に入っている果物も食べることができ、どれも寒い季節にちょうど良い、温まる飲み物です。これらでは少し違った個性的なメニューをぜひお楽しみください。



再利チヤハルと云テヤルモ時ヨリヤコシキ
 詩文ノ雑誌ハ全リ迹リ絶エシモ流行セズ花月ノ抑北ノ死後ハ要ス
 ナリ 枕詞風雅モ出物セズ明治詩文モ立絶ニ成リ新ニ成リハ
 手ヲ終リテモ時ヲ終リテモ見テハ人ハ希ナリ且ツ後ハ
 書生等モ時ヲ終リテモ見テハ人ハ希ナリ且ツ後ハ
 其弊ノ新ニ成リテハ人ハ希ナリ且ツ後ハ
 其弊ノ新ニ成リテハ人ハ希ナリ且ツ後ハ
 九月十五日夜認

論考 石田少佐の微笑み——『鶏』を読む人のために——

田中実 (都留文科大学名誉教授)

鷗外森林太郎は科学者であり、医学博士、職業的には理系の立場にありました。処女作『舞姫』を発表する一年前、最初に書いた評論『小説論』(明治22・1)は、日本では当時全く知られていないエミール・ゾラの自然主義文学を拒絶し、小説創作には「天来の奇想」・「幻生の妙思」というインスピレーションを要請すると主張、これは我々人類の五感で捉えられるリアリズムを斥け、日常的現実の外部である超越の領域を小説の神髄としたのですが、ポストモダンの運動が昏迷し、頓挫した二十世紀の現代でも、まだこれには受け入れられていない、極めて驚異的で先駆的な提起でした。実際、『舞姫』は、リアリズムを踏まえ、伝統の物語文学から脱却しているのみならず、これを超克していたのです(わたくしはこれを『近代小説』の神髄と呼びます)。

一般に、『舞姫』は手記を綴る「余」、太田豊太郎が近代的自我に目覚め、挫折する物語として読まれ、分析・解釈・注釈が施されています。ところが、実は、太田豊太郎を生身の語り手とすると、その視点人物を相対化する(機能としての語り手)に注目することが読み手の急所、この(機能としての語り手)は「余」の意識できない無意識・意識下を抉り、豊太郎の意識と意識下の相克、自己分裂を周到に語っていたのでした。すなわち、『舞姫』は視点人物の豊太郎から語られていただけでなく、その対象人物である恋人エリス、大臣天方、良友相澤、あるいは諫死した母、そのそれぞれのまなざし・パースペクティブからも語られていて、それらが豊太郎といかに互いにすれ違ふか、そこに劇・ドラマが隠れ、これを読み解くと、

『舞姫』こそ日本の(近代小説)の神髄の扉を開く、嚆矢足りえていたことが見えてきます。次作『うたかたの記』・『文づかひ』になると、複数の登場人物のそれぞれのパースペクティブによる物語がさらに重層的にくつきりと語られ、多次元空間(パラレルワールド)をより鮮明にしています(現在では村上春樹がこの神髄に向かって書き続けています)。「近代文学史」は今後、大きく書き換えられます。

それから二十年近く後、日本の文壇の主流はようやく鷗外が斥けた自然主義文学が台頭、田山花袋・島崎藤村らが活躍、陸軍軍医総監になっていた森林太郎はこれに對して、『半日』でも『キタ・セクスアリス』でも、文学博士や大学教授といった知識人である視点人物の主人公達を「君」付けにし、その意識下を顕わにし、その意識下を含めた彼らの生の境界領域を「天来の奇想」によって、開き込み、その外部に立って、『印象描写』ならぬ「客観描写」(語り手)を実現させたのでした。

鷗外は、周知のとおり「予が立場」(明治42・12)で、花袋や藤村より、下座に座らされてお辞儀をしろと言われてもお辞儀をす。それは批評家の嫌ふ石田少佐流とかの、何でもちいっと堪へてみるなんぞと云ふのではありません。本当に平気なのです。」と語りますが、平気どころではありません。その本音は例えば、この『鶏』(明治42・8)では、ほとんど等身大の自己像を丸ごと見せて自然主義文学の根っこを撃っていたのです。

『鶏』の舞台である小倉は、雨が降っているのに遊郭の「赤い布団」が晒され、人の見る所に外套を脱いでおくと、盗まれるという土地柄です。しかし、人々が本能から逸脱した欲望を放恣に発散するのは、もちろん小倉の地に限りません。その象徴は東京で雇用了軍属の別当虎吉です。軍隊もまた微発という略奪の横行する所、これに對して石田少佐は部下の微発行為を限度を超えて戒めていました。この小倉でも自分の所に土産を持ってくる商人にはそれを返すし、肴を買ったのも一度だけ、胡瓜や茄子しか食べません。女中のお時婆あさんから見れば、物の値段の分らない馬鹿でおまけに吝嗇です。南隣のカボチャ頭の女から見れば、狭い敷地で鶏を飼うは迷惑な存在だけでなく、サーベルを付けた横暴者、女は天下に向けて石田を堂々と罵倒し侮辱します。これに對し、石田はその罵声を微笑みながら聞いています。上官から小言を言われている時も内心では同様です。虎吉が巧みに食料を掠め取っていることを知っても、直接責めようとはしません。石田の目に見え、耳に聴こえるリアルな現実の場、生きている生の領域、その位相は、彼らと全く異なっているからです。すなわち、彼らには美味い物を食べ、少しでも蓄財に精を出す類に生きる価値があるのに対し、石田にはそれらが意味をなさないので、石田は際立った知識人、風呂には入らず、決まった作法通りに身を清め、南アフリカの地図を広げ戦争が起こりそうな土地の地理を調べるなど、戦時下と全く同じ生活をしていきます。作品末尾、石田が「難なんぞは入らんと云へ」と放り出すのは、石田に日々の暮らしの生理作用や感情は働くものの、そこに生きる価値はなく、日常生活の基盤

が「底抜け」になっていることを(語り手)が示しているからです。『鶏』の(語り手)は欲望を放恣に放つ虎吉やお時婆あさん、南隣の女らのごく当たり前の世界観に對し、視点人物石田が微笑みを返す世界、その双方の内側をそれぞれ相対化して語り、それによって多次元空間(パラレルワールド)を表出させているのです。さらにこの(語り手)で看過できないことは、石田少佐の意識下を自身の意識が掘り上げ、己の生の在り様を丸ごと決定・獲得していることです。そこは(語り手)のまなざしと重なっています。石田は生と死を等価に見、死を生きている生にあります。

この石田の生と死を等価に見るまなざしは、志賀直哉の『城の崎にて』(大正6・5)の「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、(中略)それ程に差はない」と語る「自分」に通底しています。例えば、石田が裏庭に飛び回るたくさんの蜜蜂や井戸の石の隙間の赤い蟹を見るまなざしは、『城の崎にて』の「自分」のそれに似通っています。これが戦時下の精神、「うた日記」(明治40・9)の「たまくるところ」の生き方であり、軍医森林太郎は最前線で戦う兵士の生と死のはざまを生きていたのです。

田中実 たなか・みのる
著書に『小説の力—新しい作品論のために』(大修館書店1996年2月)、『読みのアナーキーを超えて—いのちと文学』(右文書院1997年8月)。文松澤和宏との共編著『これからの文学研究と思想の地平』(右文書院2007年7月)、須貝千里との共編著『文学が教育にできること—「読むこと」の秘録』(教育出版2012年3月)、近著に共編『第三項理論が拓く文学研究/文学教育 高等学校』(明治図書2018年10月)などがある。

活動報告

奥田佳道のクラシック音楽講座

10月10日から4回シリーズで、音楽評論家・奥田佳道氏による、鷗外のドイツ留学時代の近代クラシック音楽に親しむ講座を開催しました。多くの参加者が、貴重なコンサートフィルムなどを見ながら、バッハ、ブラームスなどドイツ音楽を楽しみました。



下町まつり／鷗外マルクト

おいしい秋の津和野

今年も下町まつりが10月20日、21日の2日間にわたり行われました。毎年恒例のスタンプリーも実施され、チェックポイントのひとつになっている当館も、沢山の方に立ち寄っていただきました。下町まつりに合わせて当館では「鷗外マルクトおいしい秋の津和野」を開催。鷗外生誕の地・島根



手書き文字の魅力や、相手のことを考えながら言葉や便せんを選ぶなど、手紙を書く楽しさを堪能した講座となりました。

津和野町から生かさび、メロン、栗などの旬の名産や、お菓子、ジャム、お酒など津和野ならではの商品を販売。普段あまり見かけない商品に多くの方が興味を持って買物を楽しんでいました。また、今年初めて焼き栗機を導入し、当館前で実演販売しました。湯気とともにほのかにあまり香りがたちこめた出来立ての焼き栗は大変好評であったという間に完売。みなさんに津和野の秋の味覚が届いたようです。



一筆箋で筆美人!

10月23日、11月23日の2回シリーズで、むらかみかずこ氏と斉藤智恵氏(いずれも手紙文化振興協会講師)による、一筆箋の書き方を学ぶ講座を開催しました。若い女性の参加者も多く、むらかみ氏の講義と魅力的な手紙の書き方(実技)とを学びました。このイベントは、毎月23日に開催している「ふみの日」の一環として行ったものです。

10月29日と11月12日の2回シリーズで、歌人・さいとうなおこ氏(歌誌「未来」選者の短歌講座を開催しました。「なかなか上手にならない」「やっと自分の時間ができたので、短歌を始めたい」「学生に戻ってもう一度勉強しなおしたい」などの思いを持つ参加者による、歌会形式の講座となりました。「短歌は身の丈にあった詩形で、歌を楽しむことで日常生活に自分だけの非日常の時間を作ることができる」という講師の言葉に、参加者からは共感の声があがりました。2回目の講座では、各々が創作した二首の歌を持ち寄り、添削会を実施。講師の指導で作品がぐんと魅力を増しました。

短歌を楽しむ



鷗外文学散策／小石川編

11月14日、森鷗外記念会常任理事・倉本幸弘氏と、小石川植物園とその界隈への文学散策を開催しました。小石川植物園は、江戸幕府が設置した薬園が始まりで、現在では東京大学大学院の附属植物園として研究や教育のため使われています。秋晴れの空のもと、倉本氏と参加者、ボランティアガイドとが、貴重な植物を観察しました。ガイドの説明には「ニュートンのリンゴ」



「メンデルの葡萄」など耳馴染みのある名前が多数出てきましたが、接木や分株から立派に育っている植物を前に、長い時間が流れたことを実感しました。そして園内に移築された旧東京医学校本館前では、鷗外が東京医学校で学んでいたころの姿を想像しながら、講師の朗読や説明に耳を傾けました。園外では樋口一葉が晩年暮らした地域や、現在も残る石畳や家屋のある丸山福山町周辺を散策し、古き時代の生活に想いを馳せる時間を過ごしました。

わが街、鷗外

福岡県北九州市の小倉は、鷗外が人生の転機を迎え、新たな旅立ちをした場所です。生誕の地である島根県津和野町、鷗外が暮らした人生を終えた文京区を含めた三都市は、文化振興と地域活性化に関する協定を結び、様々な文化交流を行っています。



右から山崎氏、小泉氏、今川氏

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

<p>1月19日(土) 10:00 ~ 17:30</p> <p>鷗外誕生日記念行事◎</p> <p>1月19日は森鷗外の157回目の誕生日です。誕生日を記念して無料で展覧会を観覧いただけます。</p>	<p>1月23日(水) 11:00 ~ 17:00</p> <p>ふみの日イベント 「ラブレター 書くこと」◎</p> <p>会場：エントランス 料金：無料 友人、恋人、家族にあてたラブレターを書いてみましょう。</p>	<p>1月23日(水) ①15:00 ~ ②17:00 ~</p> <p>ふみの日イベント「愛の詩のこと」◎</p> <p>出演：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 会場：モリキネカフェ 料金：無料(ワンドリンク注文願います) 定員：10名程度 「愛」をテーマにした詩を朗読します。</p>
<p>1月27日(日) ①11:30 ~ ②14:00 ~</p> <p>鷗外誕生日記念イベント「落語を楽しむ」◎</p> <p>出演：三遊亭らっ好氏(落語家) 会場：講座室 料金：無料 ※要展示観覧券(半券可) 定員：50名(先着順/当日整理券配布) 鷗外作品『高瀬舟』を落語でお楽しみください。その他の演目も上演予定。</p>	<p>2月1日(金)、8日(金) 13:30 ~ 15:30</p> <p>文の京ワークショップ 「文豪の自筆で学ぶくずし字」 『舞姫』から『坊っちゃん』まで(全2回)</p> <p>講師：出口智之氏(東京大学大学院准教授) 会場：講座室 料金：4000円(2回分の資料代金) 定員：45名 申込締切：1月21日(月)必着 ※ご応募は、2回ともご参加いただける方に限ります。 鷗外、露伴、漱石などの自筆資料を題材に、くずし字を読む基礎的な力を身につけます。</p>	
<p>2月23日(土) 14:00 ~ 15:30</p> <p>展覧会関連講演会「清張の描いた鷗外」</p> <p>講師：山田有策氏(東京学芸大学名誉教授) 会場：講座室 料金：無料 ※要展示観覧券(半券可) 定員：50名 申込締切：2月8日(金)必着</p>	<p>2月23日(土)~3月10日(日) 10:00 ~ 18:00</p> <p>ふみの日イベント「手紙がテーマのブックフェア」◎</p> <p>会場：ミュージアムショップ 古典から現代までの、「手紙」にまつわる文学書や詩集、歌集などを集めたブックフェアです。</p>	
<p>3月9日(土) 14:00 ~ 15:30</p> <p>朗読会「鷗外の小倉三部作を読む ~『鶏』~」</p> <p>朗読：山本郁子氏(文学座俳優) 会場：講座室 料金：1000円 定員：50名 申込締切：2月25日(月)必着</p>	<p>3月23日(土) 11:00 ~ 17:00</p> <p>ふみの日イベント「未来の自分へ手紙を出そう」◎</p> <p>会場：エントランス 料金：無料 今の気持ちやこれからの目標など、未来の自分へ手紙を書いてみませんか?</p>	

◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jp までご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外での使用はいたしません。]

編集後記

特別展「鷗外の『うた日記』」図録には、トレーシングペーパーのカバーが付いています。本図録表紙には展覧会タイトルが、カバーには罌粟の花が印刷されており、カバーを付けることでチラシと同じ構図になるようになっていきます。また、短歌一首を添えた同素材の「投げ込み」を、図録各章の扉頁に挿し入れました。鷗外の『うた日記』は、「うた日記」×「隕石」×「夢がたり」×「あふささるさ」×「無名草」の5部で構成されていて、各部の扉には短歌一首が掲載されています。図録の「投げ込み」はこれらをイメージしたものです。図録を開いたときに併せてお楽しみください！

またオリジナルグッズとして、『うた日記』の装丁をモチーフにしたブックカバーを作成しました。特別展会期中、ミュージアムショップで書籍2000円以上お買い上げの方にプレゼントしています。色違いを含めた全3種の単品販売も行っています(各2000円税込)。

交通案内

- 電車をご利用の場合
 - ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
 - ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
 - ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
 - ・JR山手線・京成線「日暮里」駅 南口 徒歩15分
 - バスをご利用の場合
 - ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00 ~ 18:00 (最終入館は17:30)
休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日~1月3日)、及び展示替期間、煙蒸期間等



文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum